

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水域



NO. 1 まさか 〈真逆〉

私が育った伊勢・松阪市には、たまにはあるが地震が起きた。震度階でいえば、せいぜい3程度、強くても4程度ではなかったかと思うが、何分、幼い頃の事だから明らかな記憶はない。まだ小学生だった頃、母と昼食を取っていた時、木造住宅の柱がブンッと唸るように揺れた。先に食事を終えていた父は、丹前の裾をひるがえして裸足で庭に飛び降り、私と母はそのまま食事続け、父の姿を嗤った。

揺れは一瞬のことですぐに静穏を取り戻した。父は病弱をおして懸命に妻と3人の子を養う人生の最中に在り、気力で体を支えていた雰囲気濃厚で、それだけにコワモテの面が強く、経営する小さな材木屋の社員からは「〇〇の虎」などと呼ばれ、悦に入っていたのではないか。

明治の男としては威厳も保ちたい。

「こういう時は…気をつけんきゃいかんのだ」と取り繕っていた姿を思い出す。

劣等生だった学生時代は6年間を要し、5年間を大阪で、あとの1年間をほぼ東京で過ごした。確かに、大阪で暮らしていた時は体感地震が無かった。松阪市の土地柄が、経済的にも言葉使いも、諸々の事象で名古屋と大阪の延長線上にあって、大阪と名古屋から逆三角形の線をたどって降りて行くと、それぞれの風土が薄まってどうでも良いような点で交わっているような気がする。

私自身、自らを関西人とも中部人とも思ったことはない。そもそも、「中部人」という言葉はなく、名古屋人でもなく、「中京」という言葉も徐々に死語になり、要するに「〇〇人」と特定されることがない、私にとっては居心地が良い立場にあって、今日に至っている。

そして、水道業界紙で働くことになって、2つの「地震」に挟まれることになった。1つは横須賀市水道局（当時）が1978年（昭和53年）から16年余りにわたって実施した震災対策であった。つまり、横須賀市、即ち、三浦半島には必ず強い地震が起き孤立する、と確信した水道事業管理者と首長が存在していたのである。

もう1方は「関西には地震がない、来ない」という圧倒的とも言える「確信」だった。関西か中部かあやふやながら、松阪は西日本に位置しているから、軽度な揺れとは言いながら地震経験者としては、この「確信」は不思議だった。昭和60年代には地震考古学が提唱され始めた。私が地震考古学の提唱者・寒川旭の著書でわずかながら学んだのは、阪神・淡路大震災の後であり、西日本で大地震の発生を後から確認するような話ながら、納得するところが大きかった。また、あちこちのデータを集めて「全国断層地図」の制作に携わったこともあり、ネットのデータベースはもとより、十分なデータがない時代ながら、果たして地図は北から南まで活断層を示す赤い線で真っ赤になった。素人の素朴な気持ちとして、地震は起こるだろうと思っていた。

そして、1995年（平成7年）兵庫県南部地震が発生し、「まさか」という言葉があふれた。「まさか」の次ぎ、即ち、行政責任や地震学者としての責任を問われる段階になった時、「想定外」が登場し、2011年（平成23年）の原発事故で異常とも思われる使われ方をした。そして、これ以降、西日本で発生した、ありとあらゆる地震において、「まさか」が連発された。もう、「まさか」は止めて戴きたい。

「大地震が来るとは思っていたけど、自分が在任中は来てほしくないと思っていたし、面倒なことはやりたくなかった」と言っただろうか。

この「まさか」、古い広辞林（三省堂）にはひらがな表記であり、その意味は「いくらなんでも。よもや」とある。講談社国語辞典では、意味は同じながら漢字表記があって、「真逆」。パソコンでは「まさか」→「真逆」とは変換しない。「マジック」は今風の新語で「正反対」の意味だと解していた。

「お前の常識や起きた後の言い訳は、判断が甘かっただけではないんだぞ。正しい判断の正反対のこと、即ち、マジックなんだぞ」と解すれば、これは軽いようで実は黒々とした皮肉が込められた現代用語と言えるのではないか。